

戦間期摂津農村の一情景

——『大阪割烹学校』と、ある豪農の家族誌

伊藤 純

●はじめに

「戦間期」……それは第一次大戦と第二次大戦の間に存在した「うたかたの／束の間の平和な時代」（一九一九～一九二六年、大正時代後半）と認識される事が多い。実際にその時代の様相を振り返ってみると、今我々が「近代的」「モダン」「洋風」「民主」「自由」などという言葉でくくろうとする文化的諸様相の多くが、この短い時代に胚胎していることに気付く。

第一次大戦に名目的に参戦しながら戦わずに得た巨大な戦時利得によって、日本資本主義は明治以来の悲願であった近代的産業国家の一端にたどりつく。ビルとハイヤーとネオンに溢れた大都会が現出し、人々は自由に考え自由に自己啓発、自己決定ができる生活空間を獲得した……と信じる一瞬を手にする。

この一文は、筆者の実母にかかわる『家族誌』である。実父（貴司山治）は大衆小説家であると同時に非常なカメラマニアだったので、摂津の富農の娘であった実母周辺の人々の多くの情景

を画像として残した。その画像が、テキスト以上に当時の人々の息吹を、まざまざと語ってくれているように思う。

●ある豪農の屋敷を訪れる

「摂津」とは元来、

淀川と大阪湾が接する重要な水運基地「津」をガバナンスする（＝摂る）という古代権力の志向を含意する呼称だったと思われる。しかし、長い年月の間に海と川に接する地域は



図① 摂津地方の大きな溜池は、鎮守の森の神の池でもあった（撮影時期：大正後期 貴司）

(1)

繁栄した市街地に変容し、近代的な都市名がとって変わり、誰もそこが「摂津の国」であったことを忘れた。

今、我々が「摂津」としてイメージするのは、市街地の後背に広がる広大な平野の光景である。今は住宅がこの平野を覆い尽くしているが、一九二〇〜三〇年頃、そ

こには果てしない田園（主に水稲田）が広がっていた。

その広がりの中に点々と集落が点在するが、この地域はほぼ図②のような、広い農耕地の中に数十戸の農家が蟬集する集村型の集落であり、集落の各戸はいずれも大きな構えを示し、耕地の生産力、収益力が豊かであることが暗示されている。

実際にそのような場所を訪れてみると、数十戸の家屋が集まる集落が望見できる。その集落のほぼ中央に、白い漆喰の築地塀を繞らした大きな屋敷が見えてくる。仮に「村山家」と呼ぶことにするが、築地塀の外側には幅一間くらいの掘割りが繞っている。

正面に回ると、築地塀が途切れ門長屋に変わる。門長屋を両



図② 豊かな耕地と集村型の集落（大正後期 貴司）



図③ 築地塀と掘割（2007年 伊藤純撮影）



図④ 門長屋と観音開きの大きな門扉（2007年 伊藤純撮影）

翼として城郭の城門かと見まがうような堅固で大きな門がある。その門は通常は閉じられていて、普段の出入りには幅二尺高さ四尺ばかりの脇門（くぐり戸）を使う。くぐり戸は普段は閉まっているが、力を籠めて押すと「ガラガラ」と大きな音を立てて分厚い板戸が内側に押し開かれる。この板戸には太い鉄鎖が繋がっていて、その鎖の重みで普段は自動的に閉じられている。力を籠めて押すと扉が開くと同時に引っぱられた鎖が大きな音を立て、人の出入りがあつたことを知らせるのである。観音開きの大きな門扉は、滅多に開かれることは無い。

脇門をくぐると、正面に萱葺きの大きな母屋があり、その前は百坪たらずの広い前庭になっている。画面の中央付近（乳母車が置かれている所）が式台構造の正式の玄関だが、さすがにこれは使われていない。今は人が座っている部分の右側、土間に

能な広い裏庭が存在していた……それらには戦後の変遷の中で無くなっている。

それに対して、この広庭の左側……図⑥で樹木が茂っている部分は、「築庭」とこの家族が呼び習わしていた和風の庭園で、ほとんど変容無く百年以上の時の流れを留めている。

特に目に付くのは、この庭園の中央に大きく屈曲して印象的な姿を示す「五葉の松」の老巨木である。恐



図⑤ 萱葺きの母屋とその玄関先の広庭
(2007年 伊藤純撮影)

直接通じる出入り口が日常の出入りに用いられている。

図⑤では見切れているが、この前庭のすぐ右側には大きな土蔵があった。更に、図⑥の Google マップで上空から全景を見ると、もともと右側の斜線部分は、出入りの小作人が搬入した穀を脱穀して俵詰めにするなど、農作業が可



図⑥ 上空から見た全体図 (2020年 Google マップ)

族写真の一枚を示す。松の老木の姿は二〇〇七年とあまり変わらないが、この写真は実はほぼ九〇年前、すなわち一九三三年頃撮影されたものと推定される。なぜなら一歳くらいと思われる小生自身が写っているからである。

さらに、図⑨に示すのはこの古木を背景に撮影された村山家「三



図⑦ 「築庭 (つきにわ)」と呼ばれている庭園
(2007年 伊藤純撮影)

らく数百年生き続けており、屈曲し大きなウロができているがなお五葉の葉を茂らせている。

この古木は、この家の家族にとってシンボルツリーのような存在だったと考えられる。ことあるごとに家族の記念撮影などはこの老木の前で行われる……例えば図⑧に家



図⑧ 「五葉の松」の前の家族写真 (1933年頃 貴司)

姉妹」の写真である。右が長姉水田（村山）百合、中央が末娘（三女）村山美恵、左端が次女村山恵津（筆者の実母）である。⁽²⁾

因みに、この写真の撮影者と比定される水田太兵衛は、画像中の長姉水田百合の夫であり、大阪本町に大きな邸宅を持つ醤油醸造家の御曹司であった。ところが商売稼業に全く興味が無く、醸造業は他人に譲り、生涯実業に従事することは無かった。カメラとグルメとダンスの、マニアックな通人として生涯を暮らした。ただ、趣味に溺れた遊び人とはいえない徹底した人物で、大阪高工（大阪高等工業学校〔現・大阪大学工学部〕）講師の肩書きを持ち、例えば醸造学会雑誌に論文を書いたり『舌鼓のうちどころ・味覚秘帖』⁽³⁾といったグルメ本を出版したりしている。



図⑨ 五葉の松を背景とした三姉妹。

新聞記者をしていた貴司はこの水田と意気投合し、写真の撮影、現像、映画紙作成に至る写真技術を学び、技術だけで無くアート面の指導も受けている。現存するアルバムには印画紙の裏に水田の指導的コメントが書き込まれた貴司や水田自身の作品が多数保存されており、図⑨の写真は会心の作例として水田が貴司に示した一枚である。

●三姉妹と「大阪割烹学校」

本来なら、このような古い歴史を背負った豪農の子女らは、しかるべき格式の他家に縁づき、大きな物語もなく、静かに時を過ごして代を嗣いでいくというのが普通の成り行きであろう。しかし、戦間期に生きる運命を背負った彼女らには、若干異なる道が待ち受けていた。

彼女たち三人は三人とも地元の女学校を出ると「大阪割烹学校」という料理学校の生徒になった。

年頃の子女が、いわゆる花嫁修業の常套手段として料理学校などに通うというのはとりたてて珍しいことではないかもしれない。……ところが、この大阪割烹学校という料理学校は少し変わっていた。それはこの料理学校の生徒たちと校長との集合写真を見ただけで感じられる。

割烹学校の栗拾いハイキングの集合写真で



図⑩ 大阪割烹学校「栗拾いハイキング」集合写真（1930年頃 水田太兵衛撮影・推定）

んど伝えられていない。

ところが、既にご紹介したように貴司の写真アルバムに関連の写真が多数発見され、あわせて『貴司山治全日記』⁽⁵⁾を精査すると、この雑誌の創刊に深く関わっていたという日を追うような具体的な記述が発見されたのである。

●大正の風

貴司山治が『大阪割烹学校雑誌』ないし『婦人之世紀』に関わりを持つようになったのは、貴司日記でみると一九二二（大正一〇）年頃のようなのである。これは貴司が、大阪時事新報の懸賞小説に入選し、それを奇貨として故郷の徳島県鳴門をでて大阪時事新報に『駆け込み』無理矢理文化部記者に採用してもらった時期からそう遠くない。おそらく割烹学校も文化部記者である貴司の取材先の一つだったのだろうと推測される。

おりから割烹学校校長の的場氏は総合的文化雑誌のようなものを世に問うという野望に燃えている最中だったようである。貴司日記には、『雑誌を出したいと云うことなので協力すること……』⁽⁶⁾という程度のさりげない文言が見えるが、結果から見るととてもそんなものではなかったようだ。徳島の田舎から突然大正モダンの都大阪に出て、新聞記者の職を得るとともに、新聞記者というサラリーマン仕事を超える「女性向け総合文化誌の編集発行」というクリエイティブワーク、それもキレイな女

性達に四六時中囲まれながら取り組めるという大変な幸運に出会ったのである。

貴司はたちまち、この出会いにのめり込むことになる。

ただ、二〇〇ページ近い雑誌を毎月編集発行するというのは、相当にヘビーな仕事である。毎月の記事企画、原稿依頼、採稿、執筆、版組、校正……普通なら少なくとも五、六人のスタッフが要る仕事だろう。それをここでは、雑誌編集などには全く素人の的場氏と貴司の二人でいきなり取り組んだらしい。貴司日記をみると頻々と学校に泊まり込むという記載が出てくる……給料を出してくれている大阪時事新報の仕事はいつやっていただろう、と思えるほど貴司はこの仕事に熱中する。

残された合本を見るとほぼ欠号は無く月刊が維持されている。一九二五（大正一四）年、貴司は職業小説家たるべくこの激務から去り東京へ出て行くが、後年、的場氏から贈られた雑誌合本の表紙には「苦闘を記念して」という献辞が書き添えられている。

数年後、貴司の妻となった恵津（前掲の三人姉妹の中姉で、割烹学校の生徒だった）が久しぶりに古巣ともいえるべき割烹学校を訪れると……

……奥さん（*的場氏の奥さん・伊藤注）はいつものように、ぐちをこぼしてゐる。子供達は例の通りはねまはり三階ではねずみがあばれてゐる。⁽⁶⁾

と、日記に書き記している。

これを察するに……想像ではあるが、割烹学校のオーナー的場氏は三階建ての大きな木造住宅に住み（恵津の記述では割烹学校と子供が暮れている的場の居宅は同じ所と読める）おそらくその三階が割烹学校の教室となっており、二階では的場氏の子供（子沢山だった）がドシンボタンとはねまわり、三階の、授業が終わって無人となった教室（料理の実習教室）では鼠たちが食物の残滓を争って駆け回っている、と的場家Ⅱ大阪割烹学校の騒然たる有様を、諧謔と、そして多分の愛着も籠めて書き留めているのだ。

この、雑然騒然とした状況と、自由勝手な発想を展開する的場氏のようなキャラクターこそ、「冷めたるココアのひと匙」などと陰鬱に語るほか無かった啄木の明治とも、また、田中（義二）サーベル内閣の号令一下戦争の二〇年へと走り出した昭和とも異なる、大正という自由で猥雑で騒々しい時代を表象するものではないかと思える。

しかもそのような自由でアウトローな精神が、そういうものとは最も縁遠いと思われる富農の家の子女にまで、さしたる抵抗もなく伝わっていく社会的文化的構造が、この時代には存在したということに驚かされるのである。

注

(1) 以下写真は何記するものを除き貴司アルバムや保存原版による。

それらの画像は「貴司」と表記。

(2) 名前は姓／名ともに仮名。

(3) 江原鈞『古鼓のうちどころ…味覚秘帖』北辰堂、一九五九年。

(4) 『大阪割烹学校雑誌』はその後『婦人之世紀』と名を変え、一九三五（昭和一〇）年まで発刊されていることがわかる。このほぼ全ては唯一大阪府立大学図書館に所蔵されており、拙宅にも一九二三（大正一二）年から一九二六（大正一五）年までの三九冊がある。

(5) 『DVD版』貴司山治全日記（一九一九年～一九七一年）不二出版、二〇一一年。

(6) 脚注(5)と同じ『貴司山治全日記』一九二八年四月六日の項（この前後は妻貴司恵津が書いている）。

(二〇二二年一月二二日)